資料６

令和６年度第１回高知県産業教育審議会の報告

令和６年６月６日開催

〇県立高等学校の在り方に関するご意見等

協議の枠組みについて	急激な少子化に対応するためには、何か主要なコンセプトが要るのではないか。県立大学の附属校化や県内枠を設けて産業系専門高校と提携して高度化していくなど、高知県も全国に先んじてやれるようなことがあるのではないか。少なくとも４～５年先を目指したようなコンセプトが出されると、県民の理解を得られ、教育関係者も活性化するのではないか。
	新しい教育構造の発想みたいなものがないと、すべての課題に対応し切れないのではないか。
学科の在り方について 学校の魅力化・特色化	高校で勉強したことと違う方向へ就職や進学した後に、その分野にあらためて就きたい、学びたいと思った時に、再教育を保障するシステム（リカレント教育など）が必要ではないか。
	中学生は、進路選択に失敗したらどうしようという不安もある。その不安を解消するために、入学後の進路変更に対応した柔軟な教育システムが必要である。
	産業系に関わらず、社会で、子供たちを、人材を育てていくという視点がもっと必要ではないか。子供たちのエージェンシー（変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り責任をもって行動する能力）を生み出していくという教育システムが大事である。
	農業科などで、環境や気候変動などに対応した作物の品種改良などの研究をする学科があればよい。本県も南海トラフ大地震が懸念されており、生命の安全は大事であるが、被災後の生活を考えたときに、農地として再び使えるようにすることなどを学ぶことができ、未来に向けての研究ができるような学科があればよい。
	最近、ジョブ型雇用という考え方も出てきている。これまでは、企業に入ってから教育を受け、定年まで勤める日本型雇用が一般的であったが、リスキリングといったように、個人が努力してステップアップしていくような考え方も入ってきている。また、人手不足の中では、一人がたくさんの技能を持たないといけない状況も生じる。学び続けないといけない状況が起きていることを教育の中でも伝えていかないといけない。
	中学生と産業系専門学科の高校生が交流を行い、中学生が高校生の学びに興味を持つような学校間の交流が必要である。
高等学校 DX 加速化推進事業（DX ハイスクール）について	国の予算で新しい教育が行われることに期待している。デジタル分野を中学校で学んだ生徒が引き続き学べるように、中高で連携することが重要である。
	ものづくりを行っている中で、いかにデジタル化が大切であるかということを最近はとても感じている。今の高校や大学の教育でデジタル化に対応した人材を育成することによって、短い期間で会社が変化を遂げていくことができる。
外国にルーツのある子供たちへの対応	外国からの移住者が居住地を選ぶ際に、外国人に対する教育機会の確保にどのくらい配慮した教育システムがあるかがポイントとなる。高校段階で選ばれることがすごく重要。今居る外国籍の方の子供たちに、高知県の公的な教育機関が選ばれるようにするにはどうすればよいかということが重要である。
	入学試験にどのように対応するかということも合わせて、ご検討いただきたい。

〔参考資料〕審議会当日欠席委員より事前の意見聴取

学科の在り方について 学校の魅力化・特色化	「子供が行きたがらない学校」となっているのは、子供たちの意見を吸い上げてないからではないか。中学生へのアプローチでは遅い。小学生やその親へのアプローチが必要である。
	15 歳の時点で、将来の職業を含めた進路を決めることは難しい。一旦入学したら、我慢をするしかないのか。転籍や選択科目などの変更ができるなど融通が利くようにするべきではないのか。
	教師主導型の学校もしくはそのようなイメージのある学校を生徒は避ける。高校の教員にも中学校に入って授業をしてもらいたい。そのなかで、中学生も高校の授業形態のイメージを持ち、学びを肌で感じる機会をもつことが必要。中高で兼務発令などを行い、人事交流を行うべき。地域での連携を進めるうえでは、まずは教員の連携が必要。
	看護など専門分野では、県外に出て行っても、数年後に戻ってくるように、卒業後のネットワーク作りを行うべきである。
	DX 化を進める上で、教員の指導力向上は不可欠である。機器を使いこなせるように、研修を積むべきである。多職種との協働に向けて、チームの中でのプレゼン力などが求められる。校内に総合学科があるので、総合学科と看護科の生徒の交流などをとおして、協働的な学びが実践できるのではないか。
	中学生で進路を選択しきるのは難しい。そのため、家族や友人、教員の影響が強い。こんなはずではなかったと進路変更しなくていいように、自分の意志で選ぶことができるような指導が必要。
	県外に出た人材が戻ってくるように、高知県への愛着・郷土愛を育む。 小中学校の教員や保護者と、高校の教員の連携が必要である。産業教育の学びを知らない教員や保護者が多いのではないか。
	柔軟なアイデアや発想のできる人材を育てる必要がある。ものづくりなどにおいても、失敗から学ぶことがある。成功までの過程で、自力で考えることが必要ではないか。そこにものづくりの喜びがあり、工夫し作業することで学ぶことがある。応用する力が必要。
外部専門機関との連携	企業の方々に授業に入ってもらうのがよいのではないか。OB などを活用し、単発的な取組ではなく、継続的な取組をカリキュラムに位置付ける必要がある。
	いろいろな職種の方の力を借りて、課題を解決できるように、様々な人との交流を通した学びも取り入れる必要がある。
	地域イベントなどにも参加し、自分たちが身に付けた知識や技術（救護法など）を活用して、地域住民の方に貢献することが重要である。
	高知の特徴ある産業のエキスパートを育てられるようにする。地場産業と連携したカリキュラムが必要。
	地域の課題解決に取り組むボランティア活動や社会奉仕プロジェクトを展開し、生徒たちが地域社会に貢献することで、社会的な意識を高める必要がある。